

## 春期福音特別集会(1)(京都)

## 預言者イザヤの召命

## ――イザヤ書第6章――

1983年6月4日

小池辰雄

イザヤ書こそ小聖書 聖なるかな けがれたる唇の民 けがれを焼く 霊と火のバプテスマの前兆 我をつかわしたまえ 躓きの石 棄てることによって本当は拾う 聖裔 落穂拾い 霊根はキリスト 祈り

## 【イザヤ6】

1 ウジヤ王のしにたる年われ高くあがれる御座にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾は殿にみちたり。2 セラピムその上にたつ、おのおの六つの翼あり、その二つをもて面をおおい、その二つをもて足をおおい、その二つをもて飛翔り。3 たがいに呼びいいけるは、聖なるかな聖なるかな聖なるかな、万軍のエホバその栄光は全地にみつ。4 かくよばわる者の声によりて闕のとい揺りうごき家のうちに煙みちたり。このとき我いえり、禍いなるかな我ほろびなん、5 我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢れたるくちびるの者なるに、わが眼はばんぐんのエホバにまします王を見まつればなりと。

6 ここにかのセラピムのひとり鉗をもて壇の上よりとりたる熱炭を手になずさえて我にとびきたり。7 わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれなんじの罪はきよめられたりと。8 我またエホバの声をきく。曰く、われ誰をつかわさん誰かわれらのために往くべきかと。そのとき我いいけるは、われ此にあり我をつかわしたまえ。

9 エホバいいたまわく、往きてこの民にかくのごとく告げよ、なんじら聞きてきけよ然どきとらざるべし、見てみよ然どしらざるべしと。10 なんじこの民のこころを鈍くし、その耳をものうくし、その眼をおおえ、恐らくは彼らその眼にて見その耳にてききその心にてきとり翻えりて醫さるることあらん(なからんためなり)。11 ここに我いいけるは、主よいつまで如此あらんか。主こたえたまわく、邑はあれすたれて住むものなく、家に人なく、邦ことごとく荒土となり、12 人々エホバに遠方にまでうつされ、廃りたるところ国中におおくならん時まで、如此あるべし。13 そのなかに十分の一のこる者あれども、此もまた吞みつくされん。されど聖裔のこりてこの地の根となるべし。



彼のテレビントまたは<sup>かしのき</sup>樞樹がきらるることありともその根ののこるがごとし。

## ●イザヤ書こそ小聖書

旧約聖書の中でただ一書をとれと言われたら、私は文句なしにイザヤ書をとります。ルターは詩篇を「小聖書」と言っておりますが、イザヤ書こそ小聖書ではないかと思う。イザヤ書は非常に多次の神のドラマですから、この中に創世記から黙示録まで全部集約されているような内容で、驚くべきものです。

イザヤが預言者の召命を受けた、その時点をとらえて学びたいと思います。イザヤ書6章から入ります。

### 「ウジヤ王のしにたる年

というのは紀元前740年です。イザヤは預言の召命を受けてちょうど40年間、非常に長い預言の時を過ごしたわけです。このことは第1章の所にでている。

「アモツの子イザヤがユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤのときに示されたるユダとエルサレムとに係る異象(預言、啓示)。(イザヤ1:1)」

とある。特にヒゼキヤの期のことかなり重要です。これはある意味において預言集です。必ずしも時代順に編纂してない。イザヤが預言者の召命を受けたのが第6章で、これは是非とも最初に読まなくてはならないと思うので6章を選んだわけです。これは列王記略下15章、歴代志略下26章にもちよつと出ています。

われ高くあがれる御座<sup>みくら</sup>にエホバの坐し給うを見しに、その衣裾<sup>もすそ</sup>は殿<sup>との</sup>にみちたり。

イザヤという人は、王侯貴族といった上位の階級の人たちの間にいたようです。それで、これはイザヤが神殿で見た霊的な幻です。こういった幻をよく見たのは、むしろエゼキエルがそうですけれども、エレミヤにしても預言者はみな異象にでつくわしています。みな祈りが非常に深いから、そういった異象を見るわけです。

## ●聖なるかな

### <sup>2</sup>セラピムその上にたつ、

「セラピム」というのはもともと、中国でいうと「龍」です。火のような、燃える龍のような形をした火焰天使です。セラピムのことは恐らくここにしか出てないかと思います。

おのおの六つの翼あり、その二つをもて面<sup>おも</sup>をおおい、その二つをもて足をおおい、その二つをもて飛翔<sup>とびかけ</sup>り。

顔と足とを覆って、二つの翼で飛んでいる。これは聖なる神の前にかしこむ姿です。非常に敬虔なわけです。

<sup>3</sup>たがいに呼びいけるは、聖なるかな聖なるかな聖なるかな、



これは素晴らしいユニークな言葉です。「カードーシュ」というヘブライ語ですけれども、非常に荘厳な、そしておよそこの世と次元の違った霊的な別なるもの、そういった気持がこの「聖なる」という字です。荘厳な意味です。もの凄い光をもっていますから、これを見れば圧倒されてぶつ倒れるような事態です。

### 万軍のエホバその栄光は全地にみつ。

「万軍の」とは、非常な勢いのある象徴的な言葉です。天の万軍を率いておられる。「エホバ」はもちろん「ヤーヴェー」と本当は読むわけですが、でも、「存在者」あるいは「実存者」ということです。神の「栄光」ということは、旧約から新約まで、神を讃えるときによく言われる言葉です。イザヤ書は、第一イザヤは神さまのことを特別に

### 「聖者」「カードーシュ」

という言い方をしている。これはイザヤ書の特色です。第一イザヤの音信の中心は信望愛のうちの特に「信」です。神の聖。人の側ではこれを「信ずる」ということです。宗教の一番中心になる消息です。

### 4 かくよばわる者の声によりて闕の<sup>しきみ</sup>もと揺りうごき

霊動、霊震するわけです。

### 家のうちに煙みちたり。

これも霊雲です。このことは列王記略上8章、黙示録15章を参照してください。

### ● けがれたる唇の民

このとき我<sup>わが</sup>い<sup>わ</sup>えり、禍<sup>わざわ</sup>いなるかな我ほろびなん、<sup>5</sup>我はけがれたる唇の民のなかにすみて穢<sup>けが</sup>れたるくちびるの者なるに、わが眼はばんぐんのエホバにまします王を見まつればなりと。

聖に対する概念は「けがれ」という。出エジプト記4章に、

「<sup>10</sup>モーセ、エホバに言いけるは、わが主よ我は素<sup>もと</sup>言<sup>ことば</sup>辞<sup>と</sup>に敏<sup>と</sup>き人にあらず、汝が僕に語りたまえるに及びても猶<sup>なお</sup>しかり。我は口重く舌重き者なり。<sup>11</sup>エホバかれに言いたまひけるは人の口を造る者は誰なるや。唾<sup>おとし</sup>者、聾<sup>みみしい</sup>者、目明<sup>めあき</sup>者、瞽<sup>めしい</sup>者などを造る者は誰なるや。我エホバなるにあらずや。<sup>12</sup>然れば往けよ、我なんじの口にありて汝の言うべきことを教えん。」(出エ4・10・12)

とある。ここに特に「口」のことが書いてある。モーセの場合は「火が飛んできた」ということはないが。

<sup>6</sup>ここにかのセラピムのひとり鉗<sup>ひばし</sup>をもて壇の上よりとりたる熱炭<sup>あかきひ</sup>を手になずさえて我にとびきたり。<sup>7</sup>わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれなんじの罪はきよめられたりと。

これは特別な異象、みな霊的現象です。



イスラエルの民は神に選ばれた民で、申命記7章を見ると、

「<sup>6</sup>其は汝は汝の神エホバの聖民なればなり。汝の神エホバは地の面の諸の民の中より汝を擇びて己の宝の民となしたまえり。<sup>7</sup>エホバの汝らを愛し汝らを選ばたまひしは汝らが万の民よりも数多かりしによるにあらず、汝らは万の民の中にて最も小さき者なればなり。<sup>8</sup>但エホバ汝らを愛するにより、また汝らの先祖等に誓いし誓いを保たんとするに因りてエホバ強き手をもて汝らを導きいだし、汝らをその奴隸たりし家よりエジプトの王パロの手より贖いいだしたまえるなり。」(申命記7:6-8)

とある。「選ばれた」ということは「聖別された」ということです。「選民」「神の民」というのはもともと自然的な関係ではない。イスラエルの民というのは選ばれて契約を結ばれた「契約の民」なんです。契約の保証となるものはモーセの律法、十誡です。これを守れば、契約はいつまでも続く。そのような選び、これは全部同じ概念なんです。それが聖別された神の民である。それはもろもろの異邦の人たちを全部、神の民にするように使命づけられているわけです。使者なんです。選ばれたのは、他の人をやはり神の選びの中に入れていく責任がある。だから、

「お前たちが偉いからではない」

ということです。また別なところには、

「お前たちは頑く々な民だから、まっさきに特に頑固なやつを捕まえたんだ」

と書いてある。個人でいいにしても、パウロなんていうのは頑固の親玉みたいなやつです。その頑固なパウロが捕まえられて、正にキリストの第一の弟子になったわけです。

### ● けがれを焼く

本来、神さまは我々を神の似姿に造っている。人間は神さまと同質に造られている。創造の暁においては、樂園を喪失するまでは、この「聖」「神聖」があつた。これはもちろん神話ですよ、神話だけれども、これは啓示の真理です。

不信によって神の言に従わなかったことが、自己本位になったことが、「けがれ」「罪」ということです。日本語の「けがれ」という言葉がどうも「汚れ」たような意味の概念をもつてきますけれども、実はこの「背き」「罪」ということがみな類似な概念なわけです。一番の罪のものは「不信」ということです。神を受けとらないこと、神の言葉に従わないことが罪のものです。従わないということは自己を立てている、自我を立てているということことです。聖なる神さまに選ばれていながら、我々はそんな背きの民なんだ。

イザヤは、イザヤ書1章で徹底的に言っているような民の中の一人であるので、恐れて平伏していた。だから、神さまはその罪、背き、けがれを焼いてしまう。「火」はおもしろい。火は審判です。審判は同時に恩恵になる。



聖なる神の前に一番大事な態度は、彼が民の罪を罪として――イザヤ自身は素晴らしい人だったんでしようけれども――

「自分は申し訳ない、穢れたる民の一人だ」

ということ。そうしたら、神さまは、

「その穢れは今、焼いてやるぞ」

というわけです。

<sup>7</sup>わが口に触れていいけるは、視よこの火なんじの唇にふれたれば既になん

じの悪はのぞかれなんじの罪はきよめられたりと。

これは背きという「悪」、背きという「罪」です。反逆です。

「信」というのを表している動物は犬です。犬というのは本当に信仰の権化みたいなものです。無条件に家の人を信じている。友人の関係でも、師弟の関係でも、信義を裏切られるのが本当に辛いことです。

イスラエルの歴史においてエホバの神さまにかくも、出エジプトの恩恵を受けて、そして荒野では律法をいただいて選びの民とされたのに、金の牛をつくって拝んだりした。これはとんでもないはなしだ。みな不信の行為、偶像崇拜です。預言者に偶像崇拜をたくさん攻撃されているわけです。

### ●霊と火のバプテスマの前兆

「火」は、モーセの場合は出エジプト記3章の所で霊火が現れた。燃えている霊火の中からエホバの声が聞こえてきた。霊火は聖なる火ですから。モーセは、

「<sup>1</sup>いはいは聖きところだから草鞋をぬげ」

と言われた。新約では、洗礼のヨハネが、

「私は水でバプテスマを施すが、私より後から来る力あるひとは、桁違いのひ

とだが、それは霊と火とでバプテスマするひとだ」

と言った。この「霊と火のバプテスマ」の前兆がこのイザヤ書の異象です。

火は光と熱をもっている。一切のものを浄化する作用をもっている。また、いろいろなものを活かす。詩篇19篇にあるとおり、太陽はもろもろのものを照らして、それを活かす力をもっている。だから、ここでは不信のけがれを焼いてしまつて、同時にこれを聖化する。光の人に、神の熱愛の人に化する。そういう不思議な作用をもっている。

「この火なんじの唇にふれたれば」

というのはそういうわけです。審判と恩恵です。恩恵の内容はどのような霊的な生命、光、愛です。烈々たるものです。

<sup>8</sup>我またエホバの声をきく。曰く、われ誰をつかわさん誰かわれらのために往くべきかと。



「われら」というのは、神さまはその天使やなにかと一緒にそれを含めて仰ったわけでしょう。そのとき我いいけるは、われ此にあり我をつかわしたまえ。

「われ此にあり」(ヒンネンニ)

とは「視よ、我」という言い方です。簡単にいうと、

「はいっ」

ということ。全面的に、全存在的に「然り」というわけです。

この移り変わり、この劇的な問答。私たちはキリストの十字架と聖霊でもって贖われました。キリストが、

「この火燃えたらんには何をか要せん」

と言われた。それは聖霊です。私たちはこの聖霊をいただくと、いかなる雨もいかなる嵐もこれを消すことができない火をいただいているわけです。あるときは、聖霊は水といわれる。これは絶対に渴きをしない水で、泉のごとくいつまでも滾々と流れる。尽きない水、消えない火、これが聖霊です。

イザヤが、「この火燃えたらんには何をか要せん」というキリストの霊のバプテスマの前兆をここでたまわったわけです。

### ●我をつかわしたまえ

皆さんの一人ひとりの体験の仕方はいろいろです、水的な体験をなさっても、火のような体験をなさっても。とにかく、

「これははつきり聖霊をいただいたんだ」

という、その告白ができなければダメです。それは、本当に体験されると、正直、誰でもちがってくる。生まれつきがどうであろうと、才能がどうであろうと、環境がどうであろうと、そんなことは相対的なことで、それを乗り越えた次元に入る。そこに入るまでは、これはしょうがない。

ルターは聖霊に溢れて、たった3か月で新約聖書を翻訳してしまった。彼は神の言と神の霊とは決して離していない。正に「霊言」です。

イザヤを読めばイザヤとなり、エレミヤを読めばエレミヤとなる、そういう聖書の読み方ができるんです。イザヤのこの異象は、

「ああそうでしたか」

ではない。ジーツと冥目して祈り心でこれを読んでいると、全身が霊に満ちて異言がほとばしってくる。彼はもうエホバのものになってしまった。

「私は預言者でいっしょ」

なんて言っちゃしない。

「みなと同じ罪びとです、参りました」



と言って、そして、火で焼かれて、火のバプテスマを受けて、そして、神さまから、  
「悪は除かれ、罪は清められた」

となったら、もう自分は完全に贖われたというので、

「誰をつかわさん」

と言われた時に、

「はいっ、私です。我をつかわしたまえ」

と言った。これは聖霊が入っている権威の答です。決して威張っているのではない。この  
召団というものは、一人ひとりが「我をつかわしたまえ」という気合の生き方になってい  
かなければね。

## ●躓きの石

9 エホバいいたまわく、往きてこの民にかくのごとく告げよ、なんじら聞  
きてきけよ、然どさとらざるべし。見てみよ、然どしらざるべしと。

「聞きてきけよ」とは「よく聞け」ということです。ヘブライ語は強く言うときにこうい  
言い方をする。「涙を泣く」とか「死を死ぬ」とか。

「よくよく聞いてみる、けれども悟らない。よくよく見てみる、けれども分らない」  
という、凄いいい方です。

これはマタイ伝13章に引用がある。

「10 弟子たち御許に來りて言う『なにゆえ譬<sup>たとえ</sup>にて彼らに語り給うか』」11 答えて  
言ひ給う『なんじらは天国の奥義を知<sup>し</sup>ることを許されたれど、彼らは許されず。  
12 それ誰にても、有<sup>も</sup>てる人は与えられて愈々豊<sup>いよいよ</sup>かならん。されど有<sup>も</sup>たぬ人は、  
その有<sup>も</sup>てる物をも取らるべし。13 この故に彼らには譬<sup>たとえ</sup>にて語る、これ彼らは  
見ゆれども見えず、聞こゆれども聴かず、また悟らぬ故なり。14 斯てイザヤ  
の預言は、彼らの上に成就す。曰く、「なんじら聞きて聞けども悟らず、見て  
見れども認めず。15 此の民の心は鈍く、耳は聞くに懶<sup>ものう</sup>く、目は閉じたればなり。  
これ目にて見、耳にて聴き、心にて悟り、翻えりて、我に医<sup>い</sup>さるる事なから  
ん為なり」16 されど汝らの目、なんじらの耳は、見るゆえに、聞くゆえに、  
幸福<sup>さいわい</sup>なり。17 誠に汝らに告ぐ、多くの預言者・義人は、汝らが見る所を見ん  
とせしが見ず、なんじらが聞く所を聞かんとせしが聞かざりしなり。」(マタイ  
13・10〜17)

この所です。

10 なんじこの民のこころを鈍くし、その耳をものうくし、  
神の霊が来てないからです。

その眼をおおえ、恐らくは彼らその眼にて見その耳にてききその心にてさと



り翻<sup>ひるが</sup>えりて醫<sup>い</sup>さるることあらん(なからんためなり)。

それはどういふことかという、イザヤが語ると、真理に躓<sup>つ</sup>くんです。そして一層、心が頑<sup>がん</sup>くなになる。だから、どうにもならん。ちょうど、我々が福音を語ると、そうでないような方々が逆に硬化現象を起<sup>おこ</sup>し、

「もうそんなものは(要らないぞ)」

ということと拒<sup>く</sup>む。それと同じようなわけです。キリストが「躓<sup>つ</sup>きの石」と言われるのも、そういうわけです。福音は躓<sup>つ</sup>きであるという。本当に躓<sup>つ</sup>き倒れればいいんですよ、

「私は躓<sup>つ</sup>いて倒れたが、やはり相手は本ものだ」

と気がつけば。躓<sup>つ</sup>いて、どこかへ逃<sup>に</sup>げてしまったらいかん。

これはパウロがコリント前書1章、2章で言っているとおりで、

「聖霊を受けるまでは、いくら語つても、聞いても、彼らは分らないんだ」

と。それを別な表現をしているのがこのイザヤなんです。

「<sup>18</sup>それ十字架の言は<sup>ことば</sup>亡<sup>し</sup>ぶる者には愚かなれど、救<sup>すく</sup>わるる我らには神の能力<sup>ちから</sup>なり。<sup>19</sup>録<sup>しる</sup>して『われ智者の智慧をほろぼし、慧<sup>ちから</sup>を空<sup>く</sup>しうせん』とあればなり。」

(コリント前1・18〜19)

これはみなそうなんです、自分でもつて殻を閉<sup>と</sup>じてしまう。

「<sup>9</sup>録<sup>しる</sup>して『神のおのれを愛する者のために備<sup>そな</sup>え給<sup>たま</sup>ひし事は、眼<sup>め</sup>いまだ見<sup>み</sup>ず、耳<sup>みみ</sup>いまだ聞<sup>き</sup>かず、人の心いまだ思<sup>おも</sup>わざりし所なり』とあるが如し。

だから、これにぶつかった時に、平伏<sup>へいふく</sup>さなかつたら、それは本当に受けとることができないということなんです。

<sup>10</sup>然れど我らには神これを御霊によりて顯<sup>あらわ</sup>し給<sup>たま</sup>へり。御霊はすべての事を究<sup>きう</sup>め、神の深き所まで究<sup>きう</sup>むればなり。<sup>11</sup>それ人のことは己<sup>おのれ</sup>が中にある霊のほか<sup>ほか</sup>に誰か知る人あらん、かくのごとく神のことは神の御霊のほか<sup>ほか</sup>に知る者なし。<sup>12</sup>我らの受けし霊は世の霊にあらず、神より出<sup>い</sup>づる霊なり、これわれらに神の賜<sup>たま</sup>ひしものを知らんためなり。<sup>13</sup>又われら之を語るに人の智慧の教<sup>おし</sup>うる言を用<sup>もち</sup>いず、御霊の教<sup>おし</sup>うる言を用<sup>もち</sup>う、即ち霊の事に霊の言を当<sup>あた</sup>つるなり。」(コリント前2・9〜13)

その通りです。次元がちがう。これは妙なものですよ。

●棄<sup>す</sup>てることによって本当は拾<sup>ひろ</sup>つ

パウロも、ユダヤの律法には非常に詳しく、またそれをよく拳<sup>ふく</sup>々服膺<sup>ふくよう</sup>して、「我こそは」<sup>わが</sup>と思<sup>おも</sup>っていたんだ。ところが、それは本当は霊盲<sup>れいめう</sup>であつた。霊盲であるけれども、彼のその熱心は、キリストは見ていた。自己本位の熱心を神本位の熱心にひっくり返してやろうと、それでパウロを打ったわけです。そして、



「エホバの熱心これを為す」

ということになってしまった。エホバの熱心が、キリストの熱心が彼の中に入ってきた。

「あの人は信仰の熱い人だ」

なんて、そんなのは当てにならないよ。空っぽの方がいい。

「キリストの信」

が入ってこなくては。「自分の信仰」なんかは、私は当てにしない。それで楽なんです、キリストが自ら責任を負ってくださるから。これは小乗的な責任とは違う。

「我をつかわしたまえ」

というのは、福音が楽しくてしょうがないものだから、人にどう思われたって、これは伝えざるを得ない。本当のものを伝えていると、人間の魂は本ものに触れると何か感ずるんです。だから、遠慮は要らん。なにも人に強いることはないけれども、言うべきときにははっきり言う。いわゆるお説教や説得なんていうことはすることはしない。

10 なんじこの民のこころを鈍くし、その耳をものうくし、その眼をおおえ、恐らくは彼らその眼にて見その耳にてききその心にてきとり翻えりて醫さるることあらん（なからんためなり）。

一遍、彼らが悔い改め神に戻る、神に帰入する魂になるまでは、いくら聞いたってダメだから、逆に大いに、彼らをものうくする、聞こえなくする、見えなくする。ということは実は、「見えなくなる、聞こえなくなる」と言っただけで構わない。そして、見えず、聞かず、分からずということ、

「何かしらんけれども、参った!」

と言って、あるがままの姿で戻ってくれば、今度は、見えてくる、聞こえてくるんです。そういうことを烈しい逆説的な言い方をしている。棄てているようだが実は、棄てることによつて本当は拾うわけです。

## ●聖裔

11 ここに我いいけるは、主よいつまで如此あらんか。主こたえたまわく、邑はあれすたれて住むものなく、家に人なく、邦ごとく荒土となり、12 人々エホバに遠方にまでうつされ、廢りたるところ國中におおくらん時まで、如此あるべし。

これは一種の捕囚の預言みたいです。段々亡びていく。預言者にはもう見えるんですね。

13 そのなかに十分の一のこる者あれども、此もまた吞みつくされん。されど

聖裔のこりてこの地の根となるべし。

この一句は大事です。十分の一が残っても、これもダメになってしまう。けれども、聖裔が残つてこの地の根となる。



「<sup>きよきたね</sup>聖裔」

とは大事な言葉です。ローマ書11章に、

「<sup>のこ</sup>遺れる者」

という言葉がある。

「然れば我いう、神はその民を棄て給いしか、

イスラエルはダメだ、異邦人が救われていく。では、「神はその民を棄て給いしか」と、

決して然らず、我もイスラエル人にしてアブラハムの裔<sup>すえ</sup>ベニヤミンの族<sup>やから</sup>の者

なり。<sup>2</sup>神はその預<sup>あらか</sup>じめ知り給いし民を棄て給いしにあらず、汝らエリヤに

就きて聖書に云えることを知らぬか、彼イスラエルを神に訴えて言う、<sup>3</sup>『主

よ、彼らは汝の預言者たちを殺し、なんじの祭壇を毀<sup>こぼ</sup>ち、我ひとり遺<sup>のこ</sup>りたるに、

亦わが生命をも求めんとするなり』と。<sup>4</sup>然るに御答は何と云えるか『われ

バアルに膝を屈<sup>かが</sup>めぬ者、七千人を我がために遺し置けり』と。<sup>5</sup>斯のごとく

今もなお恩恵<sup>めぐみ</sup>の選<sup>め</sup>びによりて遺れる者あり。<sup>6</sup>もし恩恵によるとせば、もは

や行<sup>おこな</sup>いによるにあらず、然らずば恩恵は、もはや恩恵たらざるべし。<sup>7</sup>然ら

ば如何に、イスラエルはその求むる所を得ず、選ばれたる者は之を得たり、

その他の者は鈍くせられたり。<sup>8</sup>『神は今日に至るまで彼らに眠れる心、見

えぬ目、聞こえぬ耳を与え給えり』と録<sup>しる</sup>されたるが如し。』(ロマ11・1-8)

イザヤに言われているとおりですね。「<sup>きよきたね</sup>聖裔」というのは、ここに書いてある「遺れる者」

のことです。それが根となる。

### ●落穂拾い

20世紀も世はだいぶ末です。けれども、私たちは決して失望することなく、情況が悪くなればなるほど逆に力を出して、なんとかして一人でも二人でも人を「遺れる者」の中に入れようとする。それを「落穂拾い」という。即ち、遺れる者が落穂なんです。それを拾って、神の蔵の中に入れてなくてはいいかん。

だから、我々はどこまでも世の末にいたるまで、ひっくり返るまで、一人ひとりが伝道の使命をおびています。救われたということは、選ばれたということは、伝道の使命をおびている。クリスチャンはみな本質的には預言者・使徒なんです。本質的には一人ひとりが伝道者、一人ひとりが預言者で使徒である。特に使徒的信仰はそういうわけです。一人の人がキリストを発見して、そしてキリストの中に飛び込む。我々は伝道していて、それを見るほどうれしいことはない。一番嬉しいことは魂の救われることです。ぜひ、それはやってくださいよ。

「神さま、どうか、そういう救いを要する人に会わせてください。私はそれに何とかして語りかけたい」



と。いわゆる折伏<sup>しやくふく</sup>ではない。キリストの深い愛をもつて語りかける。そして、一緒に祈る。もう正直、20世紀は危機的な情況にありますので、いい加減な信仰ではもたない。一人でも救いに入れようと、マルチン・ルターが、

「もし明日、世界がひっくり返るといことがあっても、私はリンゴの苗木を植える」と言った。彼は農家だから、自分の仕事をして何とかして人を救っていく。そして、この地の根となる。

彼のテレビントまたは樅<sup>かしのみ</sup>樹がきらるることありともその根ののこるがごとし。

私たちは、聖霊の遺れる民は根つこの存在です。根幹というでしょ。根が一番大事なんです。そして、ひこばえが出てくる。そのことは後の方に出てきます。

聖<sup>きよ</sup>きたね、聖き根ということ。イザヤ書6章は、特に召命の記事として非常に重要です。新約の十字架・聖霊の恩寵を受けた聖霊の人は根つこの人間だということ。そして、それは遺れる者で、どんなに世の中がひっくり返っても、その肉体がたとえ飛び散っても、霊的存在としては、この「霊根」は黙示録22章みたいに、絶対に神の国の樹となっていく。

### ●霊根はキリスト

イザヤ書6章を読んで、そういうことを今学んだわけですが、もうひとつ最後に言いたい。本当の「霊根」はキリストであります。キリストは、

「我は葡萄の樹、汝らは枝なり」

と仰ったが、

「我は葡萄の樹の根なり」

ということ、いかに根が大事かということです。キリストという根は神の霊の光を受けて、我々の大地にゆるぎなき根をはる。岩があろうが、石があろうが、この根は岩を砕いても張るような根です。どんな嵐がこようが、日照りがこようが、地下水まで届いているところの根です。そういう強靱な根つこです。キリストという大きな根から幹が生じて、限りなく枝がでて、花が咲いて果が実る。これは正にヨハネ伝15章です。この根に私たちは連なっていると、我々の枝からまた根が出てくる――そういう木がある――そのように、我々はキリストの根からだんだん枝が出ては、そこからまた根をはっていくようにして、神の国が展開していく。お互いに、そのような連なりをもつて進んでいきたい。

もう概念の規定ではありません。そこに本当に生命が吸い上げられているか、花が咲いているか。一人ひとりの花はみな違う花です。その果はみなちがう。決して一律ではない。そういう不思議な木です。一つの木からいろいろな花や果が実る。我々はそういうわけです。根が一つで幹が一つ。そこから咲く花は多種多様である。そういう不思議な世界がこの聖霊の豊かな世界であると思います。これが大交響楽です。

今日は素晴らしい花が活けてあるが、皆さんはこの花を見て、今私が言ったようなこと



をぜひ味わっていただきたい。私は一番小さな花になる。あなた方はまた別の花なんだ、何でもいい。そのようにして、神の栄光をお互いに讃美する。

### ● 祈り

祈ります。イザヤを呼びだし、あなたに背ける現実にあるところの危機的なイスラエルの民に特別な御旨をもつて、あなたは神殿においてイザヤに示されました。

「聖なるかな、聖なるかな、万軍のエホバ。その栄光は全地に満つ」

とセラピムたちが叫びましたが、それで神殿のしきみは揺るぎました…(異言)…。驚くべきあなたのこのお示しの下において、イザヤは本当に穢れたる民の一人として平伏しましたら、あなたはイザヤを火をもつてバプテスマし、そして、

「汝既に聖められたり」

といって、彼は聖きたねとせられて、また聖き根とされて、立ち上がられました。

「我ここに在り、我を遣わしたまえ」

と、私たち一人ひとりも、そのようにイザヤと共にキリストにあつてこの召命にあずかり、それぞれの危機的な現実において使命を果たして行きます。

この兄弟姉妹たちは一人ひとりが天下一品の存在です。あなたの聖霊をいただければ、それは驚くべきことになります。もはや人間的な何ものでもありません。私たちはその証者となること、預言者のごとくまた使徒たちのごとくありたくあります。

今のキリスト教界は次元のズレがきて、世界がひっくり返りそうなところにおいて、あなたの御光をいよいよ照らすことのできないような現実です。聞けども聞かず、読めども読めない、そのような聖書の読み方をしている時にあたって、あなたは私たちに本当に霊言をもつて迫り、霊根をもつて迫りたまひまして、感謝いたします。私たちはこの預言者の書をあなたの御光をもつて読みかつ食らいます。我々の中にたぎる聖霊のこのご恩寵を感謝いたします。一人ひとり全存在をもつて御名を讃え奉ります…(異言)…。

どうぞ、主さま、この兄弟姉妹たちをいよいよ、うつて一丸として、お使いくださるよう切に願ひ奉ります。今、尽くしませんが、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に御名により捧げ奉る。アーメン。

